

木曾三川下流域での干潟再生への取り組み

産業構造の変化と藻場・干潟の減少

海の豊かな恵みをもたらす木曾三川下流部での暮らしは、度重なる水害を克服してきた歴史でもありました。昭和34年には伊勢湾台風が東海地方を襲うなど、近年も大きな被害が発生しました。このため、高度経済成長期以降、安全対策として防潮堤が建設されました。同時に経済発展を支える農地や工業用地の確保のため、干拓や埋め立てが進み、産業活動に必要な地下水の汲み上げは地盤沈下を引き起こしました。

このように、漁業と農業中心の産業構造が大きく変化することで、木曾三川河口域の様相は劇的に変化しました。そして、多くの人々の暮らしも海から離れていきました。



昭和22年
河口域には広大なデルタが広がり、藻場や干潟が豊かな海を育んでいました。



平成3年
干拓や埋め立て、地下水の汲み上げによる地盤沈下など、産業構造の変化に伴って、河口域の藻場や干潟は激減しました。期を同じくして漁獲量も減少の一途をたどりました。

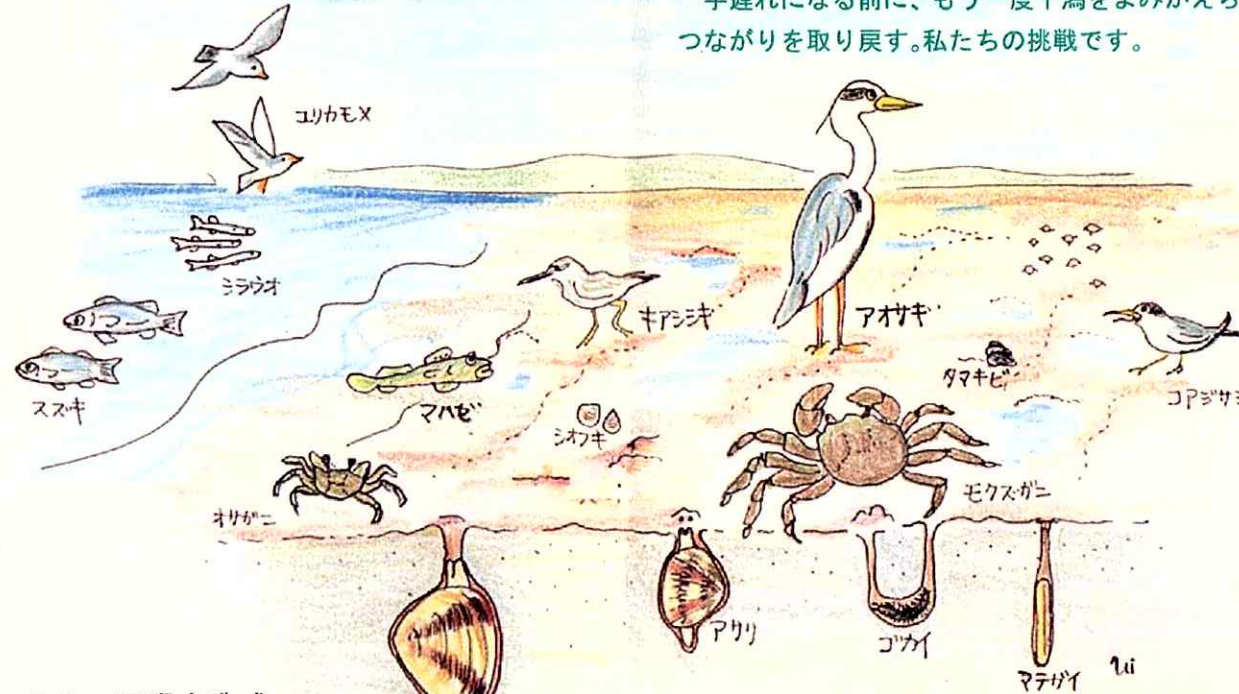
干潟の変遷



そして今… 新たな挑戦のはじまり

私たちは便利で一見豊かに思える暮らしとひきかえに、海の恵みを失ったことに気づきはじめました。海の恵みを次世代にまでつなげていくことは、重要なことです。

手遅れになる前に、もう一度干潟をよみがえらせ、人と海のつながりを取り戻す。私たちの挑戦です。



約20haの人工干潟を造成

木曾三川河口域では、干潟の減少により生物種が減少しました。そこで、生物多様性を取り戻すために、当時、自然再生という概念がほとんど普及されていない中で、建設省としては他に先がけて地元関係者と連携を図り、長良川の浚渫土を有効利用し城南沖と長島沖に置いて、面積約20haの人工干潟を2箇所造成しました。



干潟創出の効果

干潟を創出することにより、魚介類の生息環境が創出され、漁業の振興にも役立つことが期待されています。

人工干潟で確認された主な生きもの



干潟の主な生息種【春季】

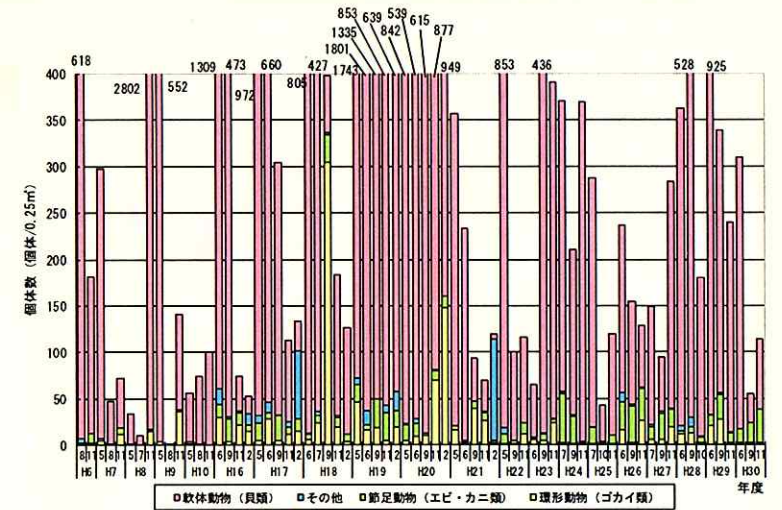
干潟周辺	干潟上(幹波帯・冠水時)
アカエイ	コノシロ
ヒイラギ	カタクチイワシ
スズキ	シラウオ
キチヌ	ウグイ
クロダイ	トウゴロウイワシ
クロウシノシタ	メナダ属
	ボラ科
	スズキ
	シロギス
	クロダイ
	マハゼ
	ウキゴリ属
	ヒメハゼ
	ハゼ科
	ナベカ
	コチ
	イシガレイ
	クロウシノシタ
	トラフグ属
	ハマグリ、アサリ
	イシガニ
	モクスガニ
	マハゼ
	産卵のための降海

注 1. 青字：稚魚のみを確認した種、赤字：成魚のみを確認した種をそれぞれ示す。
2. 魚類は全種、魚類以外は水産上の有用種を表記している。

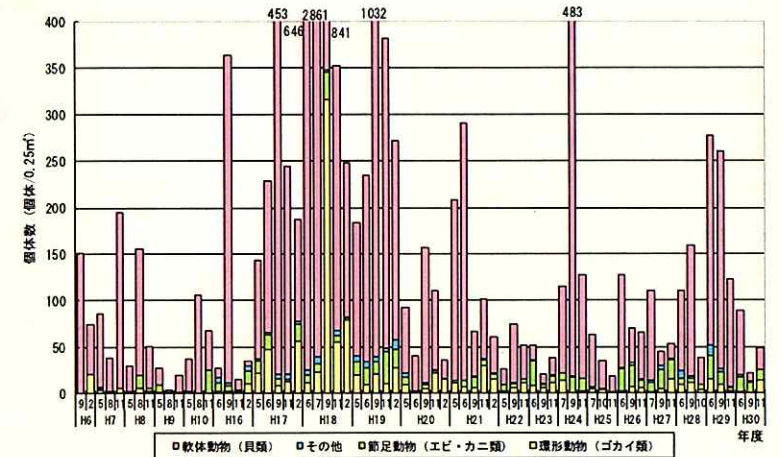
人工干潟造成の効果の確認

干潟の造成後24年が経過し、地形や底質は概ね安定した状態が保たれています。その結果、造成した干潟が多様な生物の生息場として機能していることを確認しています。

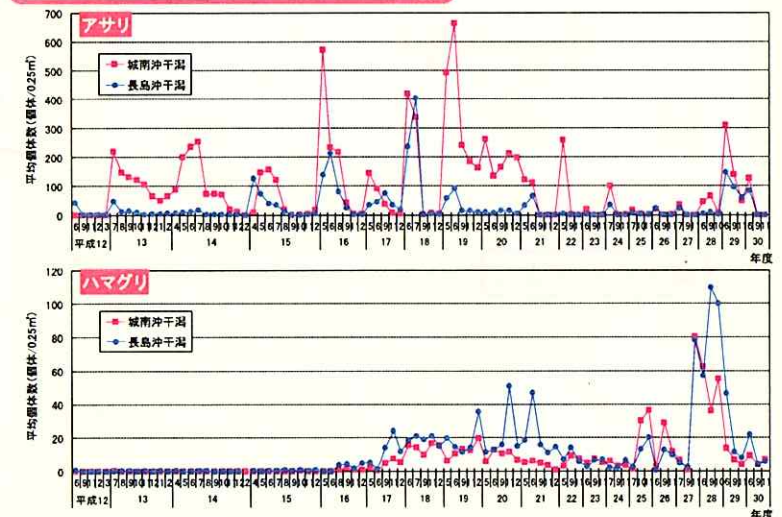
底生動物個体数の経年変化(城南沖干潟)



底生動物個体数の経年変化(長島沖干潟)



出現数の経年変化



継続的なモニタリング調査の実施

城南沖干潟と長島沖干潟では、人工干潟造成直後の平成6年からモニタリング調査を継続的に行ってきました。

調査では、造成後の地形の変化や、生き物の生息場の条件となる底質の状況、魚類や底生動物のほか、干潟を利用している野鳥などの生き物の状況について調べています。



往時の赤須賀漁港
『ふるさと』の思い出写真集
巻名1984



現在の赤須賀漁港
(2010年)